



島袋 勉 (しまぶくろ つとむ)
1963年沖縄県生まれ。20歳で車検を扱う株式会社ラシーマを創業。自身の性格は好奇心旺盛。「千曲川を見に行こう」と病院を抜け出したり、ダイビングやロッククライミングなどにも挑戦。諦めない性格も昔から変わらないという。事故後からリハビリに付き添ってきた妹の智美さんは兄を評して「究極の楽道家」とのこと

から成長していく赤ん坊の真似をしてみよう」と思いつく。「赤ん坊のように、何でも触って匂いをかいで、口に入れてみました。そうしているうちに、不思議と治ってしまったんです。専門家の立場からすると困るみたいですが(笑)」

と笑う姿からは事故をマイナスだけに捉えていない様子が見えぬ。子がかかえる。「起きてしまったことを、あれこれ言っても仕方ないですからね。確かに大変なことはありましたが、いろいろな人と知り合いになることができたし、身長だって170cmだったのが今は180cmを超えているんですよ(笑)」

「でも、人間って困難から逃げていたら何もできなくなってしまうんです。事故に遭って、動くことが大変な状態になってしまったからこそ、挑戦しようと思ったんです」

人生で初めてのレースは04年11月のトリムマラソン(3km)。その1カ月後にはホノルルマラソンで初の42.195kmに挑戦。

「簡単なことから始めていたらいつまでたっても目標には辿りつけないというのがぼくの考え方。一番辛いことを経験しておけば、後のことは何だってできるんだから(笑)」

その言葉どおり、初マラソンでは今までにない苦しみを味わった。島袋さんが走るときに最大の問題となるのが脚の痺れと擦れ。装具の締め付けによ

「治らない」と言われた後遺症を自力で克服

島袋さんが列車事故により、両脚のひざから下を失ったのは2001年4月のこと。千葉県内の踏切内で転倒。頭を打って意識を失ったところへ列車が通りかかったらしい。「らしい」というのも本人は事故前後3日間の記憶はなく、目撃者もいないからだ。「脚がなくなっていることに気付いた

のはベッドの上でした。あるはずのない、つま先が痛い感じがしたり、これからどうなるんだろうという不安はありました。不思議と悲壮感はありませんでした。実は当時、会社が倒産寸前で……。会社に戻らなきやという気持ちの方が強かったですね」

しかし、脳や目にも障害を負った島袋さんにとって、それは簡単なことではなかった。特に、脳が外的な衝撃を受けることで起きると言われている、「高次脳機能障害」は新しいことが覚えられなくなってしまう障害。しかも、明確な治療法は確立されていない。「治しようがないと言われたんですが、自分でも研究しました。まずは本を読むことから始めようと。偶然その中に人間の脳は3%しか使われていないとあったんです。ああ、3%が破壊されたからといってショックを受けている場合じゃないと思いましたね」

97%のどこかに使える部分があるのではないかと考えた島袋さん。「ゼロ

「一番難しいことにチャレンジしてみよう」

少年のころテレビで見たホノルルマラソンに憧れて「仕事を引退したら挑戦してみよう」と思っていたという。マラソンデビューは当初の予定よりもだいぶ早まったわけだが、もちろん周囲は大反対。

「でも、人間って困難から逃げていたら何もできなくなってしまうんです。事故に遭って、動くことが大変な状態になってしまったからこそ、挑戦しようと思ったんです」

人生で初めてのレースは04年11月のトリムマラソン(3km)。その1カ月後にはホノルルマラソンで初の42.195kmに挑戦。

「簡単なことから始めていたらいつまでたっても目標には辿りつけないというのがぼくの考え方。一番辛いことを経験しておけば、後のことは何だってできるんだから(笑)」

その言葉どおり、初マラソンでは今までにない苦しみを味わった。島袋さんが走るときに最大の問題となるのが脚の痺れと擦れ。装具の締め付けによ

「エベレストという目標ができてからは、好んで路面状態が悪い道を選ぶようになりました。目標があれば苦しみも幸せに近づく一歩だと思えます」

マラソンでの目標は長野マラソンに出場するために5時間を切ること。「事故後に入院していた病院が長野にあったんです。『島袋さんが走るなら私たちも』と言っていた先生たちを引っ張り出してやろうと思っっているんです(笑)」

「治らない」と言われた後遺症を自力で克服

「Last man standing」。ゴールドコーストマラソンの翌日、新聞の一面に踊る文字。その後には「8Hours marathon with no legs」と続く。そこには、杖をつき、義足の両脚でゴールを目指す島袋勉さん(44歳)の姿が掲載されている。

走り始めてから3年間で26レースに出場。去る11月4日(日)のニューヨークシティ・マラソンでは新しい義足が脚に合わずに苦しんだが、11時間をかけて13度目のマラソンを完走した。

「高次脳機能障害」は新しいことが覚えられなくなってしまう障害。しかも、明確な治療法は確立されていない。「治しようがないと言われたんですが、自分でも研究しました。まずは本を読むことから始めようと。偶然その中に人間の脳は3%しか使われていないとあったんです。ああ、3%が破壊されたからといってショックを受けている場合じゃないと思いましたね」

97%のどこかに使える部分があるのではないかと考えた島袋さん。「ゼロ

「一番難しいことにチャレンジしてみよう」

少年のころテレビで見たホノルルマラソンに憧れて「仕事を引退したら挑戦してみよう」と思っていたという。マラソンデビューは当初の予定よりもだいぶ早まったわけだが、もちろん周囲は大反対。

「でも、人間って困難から逃げていたら何もできなくなってしまうんです。事故に遭って、動くことが大変な状態になってしまったからこそ、挑戦しようと思ったんです」

人生で初めてのレースは04年11月のトリムマラソン(3km)。その1カ月後にはホノルルマラソンで初の42.195kmに挑戦。

「簡単なことから始めていたらいつまでたっても目標には辿りつけないというのがぼくの考え方。一番辛いことを経験しておけば、後のことは何だってできるんだから(笑)」

その言葉どおり、初マラソンでは今までにない苦しみを味わった。島袋さんが走るときに最大の問題となるのが脚の痺れと擦れ。装具の締め付けによ

「エベレストという目標ができてからは、好んで路面状態が悪い道を選ぶようになりました。目標があれば苦しみも幸せに近づく一歩だと思えます」

マラソンでの目標は長野マラソンに出場するために5時間を切ること。「事故後に入院していた病院が長野にあったんです。『島袋さんが走るなら私たちも』と言っていた先生たちを引っ張り出してやろうと思っっているんです(笑)」

第20回 ランナーズ賞 受賞者の横顔

自分にとってもっとも難しいこと、それがマラソンだった 島袋 勉さん (44歳)

列車事故により両脚のひざから下を失った後「もっとも難しいことに取り組もう」とマラソンへの挑戦を決意。2004年の初マラソン(ホノルル)を12時間52分29秒で完走。以来、13回のフルマラソンを完走し、「長野マラソンへの出場」を目標に走り続ける



01-出社前に自宅近くの公園でトレーニング。1度の練習で10kmほどを走る。杖なしで短いダッシュも行う

02-2006年のNYCマラソンは8時間で完走(写真/Tomiko Yano)

03-トレーニングの間にも脚のケアは欠かせない。約5kmごとに装具の中にたまった汗を拭く

04-ゴールドコーストマラソンの翌日には島袋さんの完走が大きく報じられた

05-会社では代表取締役として業務にあたる
写真/黒田史夫